

歴史教育者協議会 第63回 福岡大会 レポート
第21分科会 障がい児教育分科会

レポート名 「肢体不自由校における夏休みキャンプの取り組み」
日時 2011年7月30日（土）～7月31日（日）
場所 九州国際大学（北九州市）



報告 竹下 忠彦
所属 都立府中特別支援学校
(東京都歴史教育者協議会・町田支部)

(1) はじめに

報告者の前任校である都立光明（こうめい）特別支援学校（東京都世田谷区：肢体不自由校）では、夏休みを利用して有志による2泊3日のキャンプを行っている。実施回数26回（2010年8月時点）の伝統行事である。キャンプする場所は、山梨県甲州市。民宿を一軒借り切り実施する。最近の参加者は、総勢40名～50名程度であり、バスを2台連ねて出かける。

実施にあたっては、教員と保護者で実行委員会を組織し準備を行う。利用する民宿はバリアフリーとは全くほど遠い民宿だが、独特の魅力があり、毎年続けて参加する保護者（子ども）も多い。本レポートでは、このキャンプがどのようにして行われるのかを報告したい。

（2）準備のこと

「たんぽぽキャンプ」の要（かなめ）は、実行委員会の立ち上げである。実行委員長は保護者、事務局長は教員が行う。委員長も事務局長もだいたい前年度に目星がついている。そして実際に動き始めるのは、1学期になってからである。

実施時期については、近年は夏休みのお盆の少し前に決まっている。（例えば第26回は8月9日（月）から11日（水）の2泊3日で行われた。）まずは、今年の日程を確定し、実行委員会から今年の募集を全校にかける。そして保護者（子ども）の参加者がでそろったところで、実行委員会を正式に立ち上げる。そして学校で事務局長（教員）も交えて何回か実行委員会を行う。教員やその他のボランティアの参加も、確認していく。（教員はボランティア職務専念義務免除の制度を利用して参加することが可能だ。）

行く場所も固定された伝統行事であるので、1日目から3日目まで、何をするか（日課）はほぼ決まっている。そこで、準備の段階で相談・確認することは、参加者の最終確認（子ども、保護者、教員、ボランティア、その他の参加者）や実行委員会内の役割分担とバスや民宿予約の手配、持っていく共通の備品・消耗品も含む荷物の確認等である。

毎年同じ形式で同じ場所に行くので、手間はかかるが、それほど大変なことではない。

（3）役割分担について

実行委員長は、今年参加者を見て、「方針」を決める。「方針」といっても同じ場所に行く行事なので、おおげさなものではないが。

事務局長は、バスの手配、民宿の予約、しおり作り、名簿づくり、教員やボランティアの募集等、総務を行う。かなり大変な仕事である。他に1～2名総務を補佐する教員がいる。

保護者の実行委員は、会計係、夜のゲーム係（キャンプファイヤーの時の出し物を考える）、桃ジャムづくり係、おみやげ係などを分担する。

（４）「たんぽぽキャンプ」行事の実際

日時：２００９年８月１０日（月）～１２日（水）

宿泊場所：山梨県甲州市塩山 民宿「ひいらぎ園」

参加者：子どもたち（小学生から高校生） １１名

子どもたちの家族 １２名

教員、ボランティア ２３名 （総計４６名）

「キャンプ」の流れの紹介。

（★別紙参照）

（５）子どもたち、保護者からの感想（２００８年度）

（★別紙参照）

（６）むすび

「たんぽぽキャンプ」の魅力

「たんぽぽキャンプ」の魅力を端的に表現すると、－『普通の田舎の民宿に夏休みに泊まり、普通子どもたちが遊んで楽しいことをめいっぱい体験する』－ことである気がする。民宿「ひいらぎ園」は、「クーラーがない、家も、畑も、道もバリアフリーでない、風呂も、トイレも使いにくい、食事形態食など用意できない」などないないづくしの民宿である。普通に考えたら都会の肢体不自由児とその保護者には、もっとも敬遠される宿泊先ではなからうか。しかし、その「ないないづくし」の中に大きな魅力が隠されているのである。クーラーがなくとも塩山の夜は涼しい。昼間も家陰に入れば十分涼しい。畑も、農道も確かに車椅子では進みづらい。しかし、軽トラックの荷台に乗せてもらい、畑やキャンプファイヤー場、プールまで行く時に感じるあの爽快感はたまらない。食事は、あゆの塩焼き、バーベQ、カレーライスなど、山の民宿の定番のメニューでボリュームいっぱい。「ひいらぎ園」で採れる桃やプラムは食べ放題だ。この定番が、参加者には大変魅力なのである。３日目の朝には恒例の餅つき大会もある。形態食を食べる子どもは、保護者が再調理をすればいいのだ。保護者が再調理に忙しければ、その子どもをよく知っている教員が、食事を介助する。参加者は、これでもか、これでもかと「夏のキャンプ体験」を２泊３日の間に凝縮して体験するのである。

この行事の意義

子どもたちにとっての意義

★肢体不自由児である子どもたちにとって、何より楽しい貴重な「夏休み体験」になっている。（50人規模の集団生活、民宿に泊まる体験。田舎の農家での宿泊体験、ナイトウォーク、キャンプファイヤー、スイカ割り、水遊び等の体験）

保護者にとっての意義

- ★保護者同士、保護者と教員の有意義で貴重な交流の場になっている。
- ★他の子どもや家族の様子を知る機会になっている。
- ★保護者にとっても、家族だけでつれていけない場所に行き、余暇活動できる、貴重な機会になっている。

教員にとっての意義

- ★保護者と教員の有意義で貴重な交流の場になっている。
- ★教員に、広い意味で子どもの教育に必要なことは何か考えさせる貴重な機会になっている。

これらのうち、「たんぼぼキャンプ」を実施する『学校ならではの』の意義は、『①肢体不自由児である子どもたちにとって、貴重な「夏休み体験」になっている。』点と『②保護者同士、保護者と教員の有意義で貴重な交流の場になっている』点であろう。

①については、社会教育や民間ボランティア活動で補えないかとも考えられるが、肢体不自由児向けの企画はなかなか存在しない。子どもたちのことをよく知っている教員が、キャンプの内容を考える点は貴重なポイントである。

②については、特に保護者にとっては、地域の障害児保護者の会等に関わらないケースが増えている。関係者との交流は学校のPTA活動のみになっている場合が多い。そう考えると、この「たんぼぼキャンプ」は保護者同士、保護者と教員を結びつける絶好の機会であると言える。